

LEARN WITH ソフトバンク ～魔法のプロジェクト～ インクルーシブ教育 実践事例

事例の活用について

※本事例の知的財産は投稿者に留保されます、使用される際には出典として
「LEARN WITH ソフトバンク ～魔法のプロジェクト 組織名」 を記載ください。

■基本情報

組織名： 兵庫県立氷上特別支援学校
所在地： 兵庫県丹波市春日町棚原 3098-1
※都道府県・市区町村
氏名： 黒田 一之
投稿月日： 令和8年2月20日

■インクルーシブ対応を検討するきっかけとなった児童・生徒（※以下「対象の子ども」と略）について

対象の子どもの学齢 高等部2・3年生
例：小6 12歳 16・17・18歳

障害種別：
知的障がい、知的障がいを伴う ASD
高機能自閉、アスペルガー症候群 読み書き障がい
注意欠損多動性障がい（AD/HD） 肢体不自由
聴覚障がい 構音障がい 視覚障がい 病弱
重度重複障がい その他（ ）

主訴（主な困り） 読む 書く 聞く 見る 話す 記憶する 移動する
その他（自尊感情の低下）

その他補足
本校高等部の生徒は、失敗体験から自尊感情が低い傾向にあり、市議会提言に向けた資料読解や考えをまとめることに苦手意識を抱えていた。そこで、**生成 AI を思考のパートナーとして導入。生徒自らが AI を使い、難解な情報を分かりやすく理解したり、画像や音楽で表現したりする活動**を行った。教員の支援を待つ受動的な姿から、ICT を活用し能動的に学ぶ姿が見られた。**卒業後も社会の中で「自分でわかって、自己選択・決定」できる姿を目指した。**

■対象の子どもが利用している ICT について

①利用端末（ハード） タブレット PC その他（ ）

②OS Windows MacOS Chrome Android OS その他

③使用した ICT の機能やアプリを教えてください。複数あれば、ボックスを追加して記載してください。ネイティブアプリ（最初から搭載されているアプリ）の URL は記載不要です。

名称：Google NotebookLM（生成 AI）

紹介 URL：<https://notebooklm.google.com/>

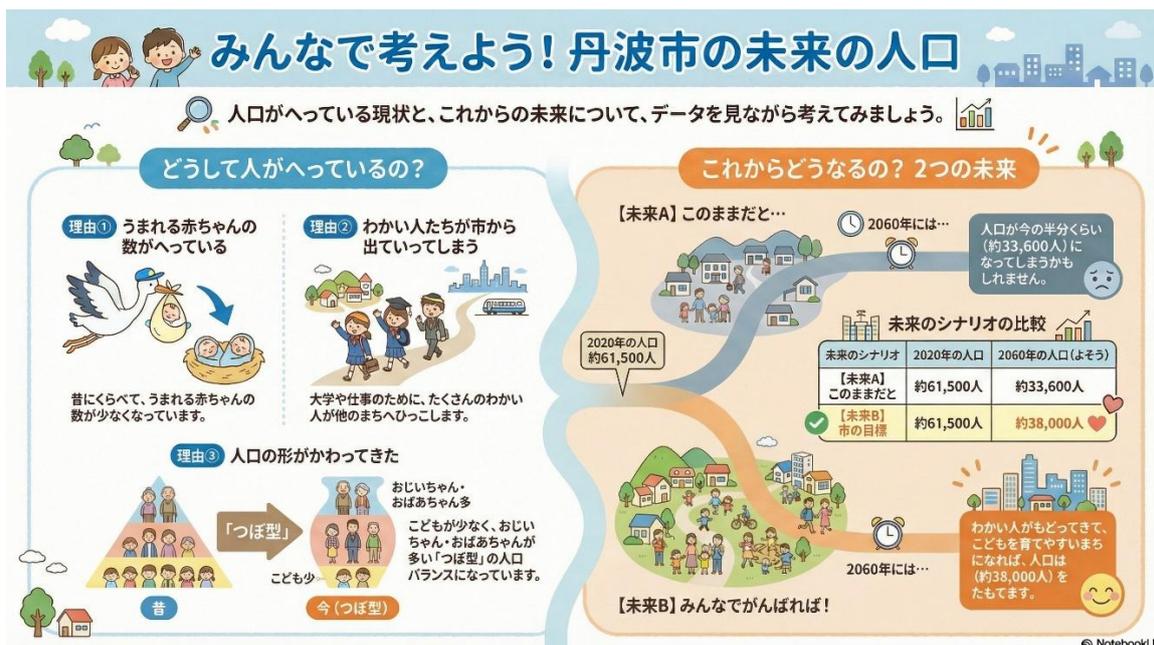
名称：Google Gemini(生成 AI)

紹介 URL：<https://gemini.google.com/>

④上記の ICT を活用して、対象の子どもの困りをどのように軽減されたかを詳しく記載ください。

1. 前提：情報のアクセシビリティの確保

まず、教員が NotebookLM に行政資料（丹波市人口ビジョン等）を読み込ませ、動画解説、音声概要、インフォグラフィック(図1)などを事前に作成した。教員によるファクトチェックを経たこれらの資料を Google Classroom で共有し、生徒がいつでも自分の得意な認知の方法（動画解説、インフォグラフィック、音声概要、要約等）で情報にアクセスできる環境を構築した。



2. 読解（インプット）における困りの軽減

授業では、まず一次資料である行政資料を全員で読む時間を設けた。いきなり生成 AI に頼るのではなく、まずは自力で向き合うステップを重視した。その後、NotebookLM で生成した視覚的・聴覚的な補助資料(動画解説)を提示することで、文字情報のみでは内容把握が困難であった生徒も、動画解説やインフォグラフィックを用いて丹波市の課題や強みを多角的に読み解くことが可能となった。(図2)

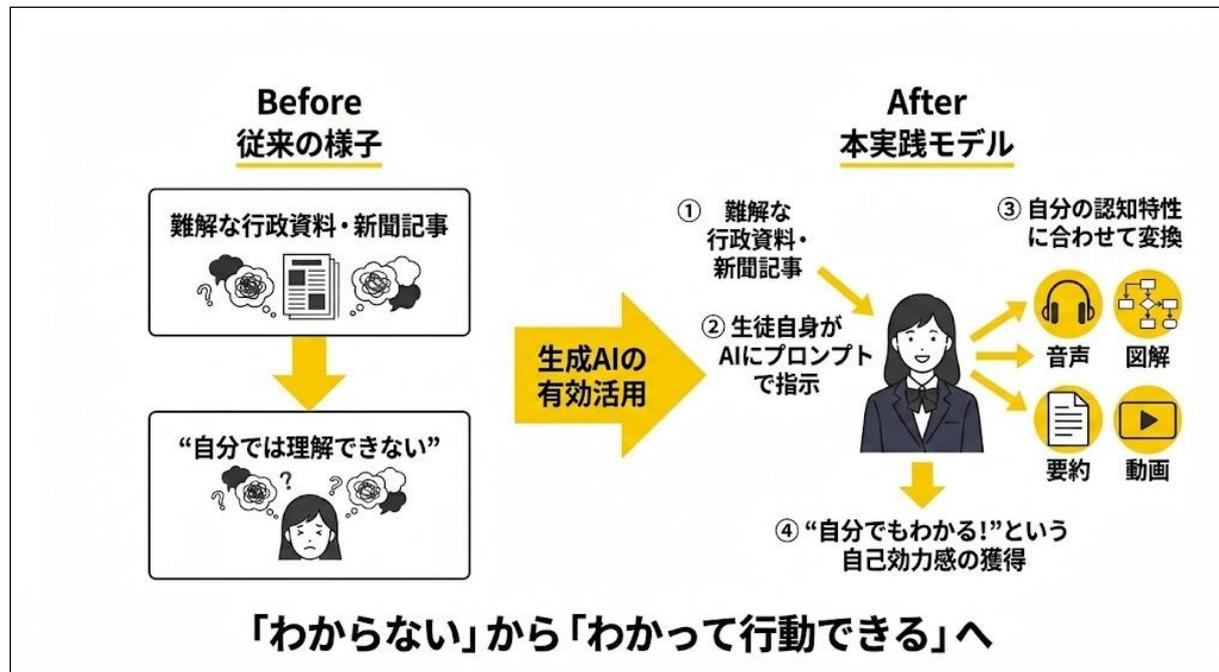


図2 本実践の概要

さらに、教室内に「要点を100文字以内で」「ポイントを3つにしぼって分かりやすく教えて」「例え話で教えて」といった、情報を分かりやすくするための具体的なプロンプトを掲示した。(図3)生徒自身がこれらのプロンプトを自ら入力し、自分の理解度に合わせて情報の難易度を調整する経験を積んだ。その結果、資料に対する抵抗感(N=10)は、事前調査の80%（「資料を好まない」）から、事後調査では0%（全員が「読みやすい」）へと改善した。また、「分かりやすさ」にとどまらず、丹波市の将来人口予測の正答率が20%から80%へ向上、人口減少の主因に関する正答率も30%から70%へと上昇した。生成AIで文章をわかりやすくしたり、インフォグラフィックや動画解説等にしたりすることで、生徒の得意な認知を活用でき、行政資料という難解な対象に対しても理解が向上した。

分かりやすくするプロンプト (AIへの指示)



図3 分かりやすくするためのプロンプトの例

3. 自分の考えをまとめ、伝えることへの困りの軽減

自分の考えを言葉だけで伝えることに自信がない生徒に対し、画像生成 AI (Gemini) および「ペルソナ AI」(Gem)を活用した(図4)。当初は「大型施設が欲しい」といった素朴な願望に留まっていた生徒も、あえて批判的な視点を持つ AI(Gem)「丹波愛おじいちゃん」等との対話を通じ、「他者の視点」を考えることができた。さらに、**画像生成 AI でアイデアを可視化することで、教員を加えたチームでの対話が活発になった**(図4)。この過程を経て、生徒は「キッチンカーによる地域交流」といった提言を練り上げ、丹波市議会議場での提言を実現した。

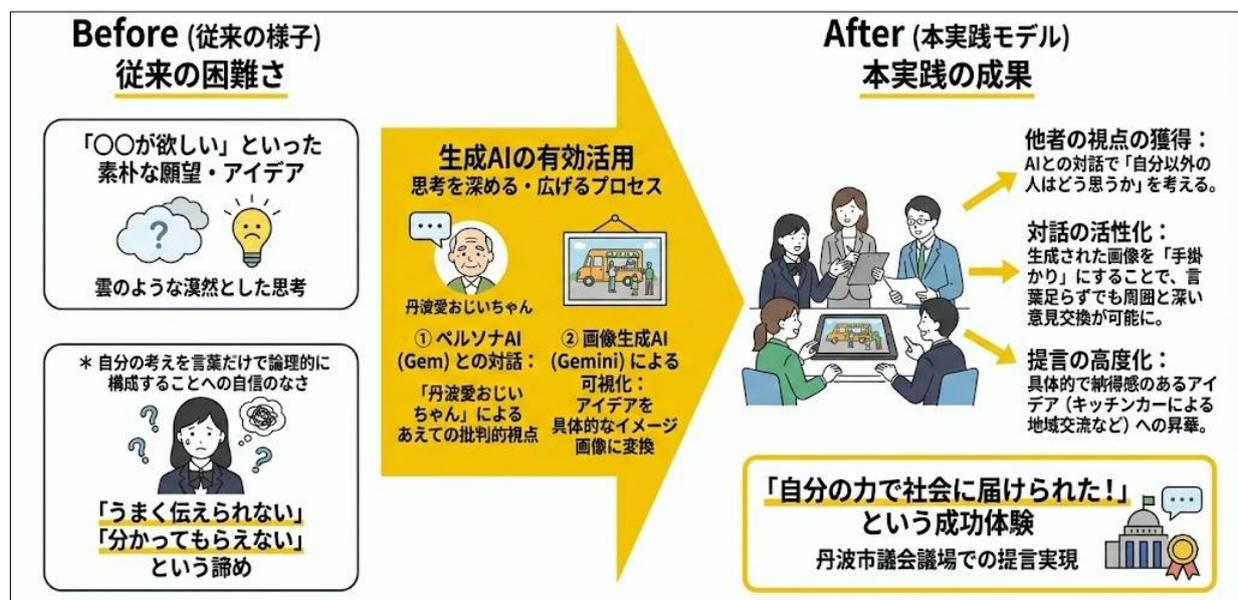


図4 生徒と教員と生成AIのチームでの対話

4. 実践の成果：自立に向けた変容

ICT（生成 AI）の活用により、情報の「受け手」として教員の支援を待つことが多かった生徒が、自らのニーズに合わせて情報を「引き出す」主体へと変わってきた。ICTの活用は、生徒の「先生の手助けなしで資料を読み解く自信（自己効力感）」を、5点満点中 2.4 点から 4.1 点へと引き上げた。（事前事後アンケートによる比較）

この取り組みが卒業後、生徒が教員の手を離れた将来においても、ICT を自らの「強み」として活用し、社会に参画していくための重要な手立てとなることを願っている。（図 5）

難しい言葉もわかる！自分たちで行動できる



図 5 本実践で目指す生徒の姿

■インクルーシブ対応状況について

1 インクルーシブ対応の検討の 児童生徒は、どの範囲まで利用が可能ですか？

教科	<input checked="" type="checkbox"/> 全ての教科で使用可能 <input type="checkbox"/> 特定の教科のみ使用可能
場所	<input type="checkbox"/> 通級等のみ <input type="checkbox"/> クラス限定 <input checked="" type="checkbox"/> 学年限定 <input type="checkbox"/> 学校全体
利用シーン	<input type="checkbox"/> 宿題 <input checked="" type="checkbox"/> 授業中 <input type="checkbox"/> 小テスト <input type="checkbox"/> 定期テスト <input checked="" type="checkbox"/> その他（卒業後、生徒の自己選択・自己決定の際の判断材料を得る場面）

2 周囲の児童生徒が ICT を使用するにあたり、個別の許可が必要ですか？

はい いいえ

■インクルーシブ対応に向けての工夫について

①環境整備に向けた実施事項/工夫点について記載ください

1. 全家庭からの「生成 AI 活用同意書」取得

高等部全員から同意を得ることで、特定生徒の「特別な道具」という特別視を排除。誰もが日常的に使える「当たり前のインフラ」として整備した。

2. 思考を深める「AI ペルソナ」の作成とチームでの対話

批判的な視点を持つ AI「丹波愛おじいちゃん Gem」等を作成。AI とチームでの対話を通じて「他者の視点」を取り入れる思考プロセスを指導した。

※AI のハルシネーション対策として、教員を交えたチームで活用した。

3. 分かりやすくするためのプロンプトの教室掲示

要約や図解などの指示（プロンプト）を厳選し掲示(図 3)した。

4. 生徒自身の判断による「AI 活用」

生成 AI を活用するか否かの判断を生徒に委ね、自己決定を尊重した。

5. NotebookLM を活用した「多形態教材」の共有

30 ページの行政資料を画像・音声・図解に変換し、Google Classroom で共有。生徒が自分に合う学び方を選べる環境を整えた。

■その他



図 6 生成 AI 活用で生徒の得意な認知を生かす

■変化や効果について

①対象の子どもにどのような変化がありましたか

1. 「わからない」から「自分でわかる」へ

難解な行政資料に対し、当初 80%の生徒が「抵抗感」を抱いていたが、AIによる情報のパーソナライズ（要約・図解）により、事後は全員が「読みやすい」と回答。情報の獲得を教員に依存せず、自力で読み解こうとする姿が育ってきた。

2. 「自己効力感」の向上

「先生の手助けなしで読み解く自信」が 2.4 点から 4.1 点（5 点満点）に向上。事前には半数いた「自信がない」生徒が 0 名となり、「ICT を使えば自分でもできる」という意識に少しずつ変わってきた。

3. 「受け手」から「発信者」へ

画像生成 AI を活用することで、伝えることを苦手感じていた生徒も自身のアイデアを可視化。市議会議場での提言を行うことができた。「自分たちの力でも社会を変えられるかもしれない」という感想を書いた生徒もいた。

②対象の子ども以外の児童・生徒や、学校全体にどのような変化がありましたか

1. 組織的な研究・検討体制

「たんばみらいプロジェクト」での実践は、研究推進の社会科チームと兵庫教育大学大学院との連携で共有したことで、知的障害教育における効果的な生成 AI 活用の在り方を、個人の試行ではなく「組織の知見」として検討することができた。

2. 教員の ICT リテラシー向上と生成 AI 活用率の増加

生成 AI の有効活用に向けた校内研修を自主的に計 7 回実施した。具体的な生成 AI の活用方法を共有することで、校務や授業準備における生成 AI の活用率が向上した。

3. 「振り返り」の多様化による UDL の実践

従来の「感想カード（文字）」に限定せず、生徒の学びを AI で歌や画像に変換するなど、多様な形式を選択できる授業が少しずつ拡がりはじめた。